

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：34315

研究種目：挑戦的研究(萌芽)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K21620

研究課題名(和文)マイノリティアークाइブの構築・研究・発信：領域横断的ネットワークの基盤創成

研究課題名(英文)Genesis, Research and Outreach of minority Archive

研究代表者

美馬 達哉(Mima, Tatsuya)

立命館大学・先端総合学術研究科・教授

研究者番号：20324618

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、マイノリティとされてきた人びとの主張や活動の記録をアーカイブ化することに挑戦し、障害、エスニシティ、ジェンダーなどのアーカイブ基盤となる人的ネットワークを構築した。具体的なアーカイブ化を通じて、マイノリティ・アーカイブズについては、さがす・あつめる、たもつ・つたえる、つかう・いかす、だけではなく、「かたる・つつる」と「たばねる・ならべる」という観点が必要不可欠と判明し、今後の展開に生かす。

研究成果の学術的意義や社会的意義

さまざまな背景を持つマイノリティ集団に関して、データを収集してアーカイブ化する基盤構築を行ったことは最大の学術的意義である。また、そうした「データ」の前提として、「話しても構わない、書いても構わない」あるいは「伝えることに意義がある」ことをループ的にマイノリティ主体にコミュニケーションすることは、エンパワメントとなり得ることを明らかにした。さらに、こうしたアーカイブズにおいて不可視化されているメタデータのあり方に関しても、その「使いやすさ」は、何を無用で些末なデータとして排除し、効率性のために何を犠牲にし、ユーザーをどう支援するためにあるのか、という問いを立てる批判的視点を確立した。

研究成果の概要(英文)：This study challenged to archive records of claims and activities of people who have been regarded as minorities, and built a researchers network that serves as an archiving basis for disability, ethnicity, gender, and so on. Through the creation of minority archives, not only (1) to search / collect, (2) to keep / convey, (3) to use / utilize, but also (4) "to speak / spell" and (5) "to bundle / organize" turned out to be indispensable. These findings will be relevant for the future development.

研究分野：医療社会学

キーワード：マイノリティ アーカイブズ

1. 研究開始当初の背景

これまで本研究代表者が医療社会学の研究を進めていく中では、本研究でいうマイノリティとしての病気や障害を持つ人びとの記録を扱うことは多かった。そのとき、しばしば研究対象となる諸事実そのものが、量的・質的な社会調査、医学史研究、当事者運動研究、社会福祉制度史研究、生命倫理学研究、手記やドキュメンタリー文学などのディシプリンを異にする分野に散逸していることに気づき、領域横断研究の重要性を痛感した。また理論的な反省を含む生命倫理学・哲学などが多様なマイノリティの雑種性や複合性を考察するのに有効であると思いついた。その一方、歴史的に見れば、マイノリティを記録することは社会統制の一翼を担う実践でもあり、とくに障害者運動において強い批判を浴びている (Nothing about us without us)。

以上の点から、マイノリティに関する記録を領域横断的にアーカイブ化すると同時に、記録しアーカイブ化することの意味を、当事者の活動と連携しつつ理論的に再考する本研究の着想を得た。

マイノリティと記録の関係性という観点から、管理・保存の技術に留まらないアーカイブの人文社会科学的な問題化を達成することは本研究の最大の挑戦である。

加えて、本研究は大学院生や若手を巻き込むチーム研究としての挑戦性をも有している。

自然科学系を中心に「オープンサイエンス」が世界的潮流となりつつあり、理系文系を問わず公的研究費による研究成果は公共的にアクセス可能なコモンズであるべきとのコンセンサスが生まれつつある。この現代的状況下でのアーカイブ化は、論文など研究成果に留まらず、資料・記録・生データのレベルでのオープンな知的交流やデータの創造的再利用を可能とするインフラとして構想されていると言える。

さらに進めて、本研究の研究方法には、研究活動とアーカイブ化を分離した活動と見るのではなく、アーカイブ化そのものが新しい領域横断的な研究を生み出す側面に着目して挑戦的な研究を推進するという独自性がある。

マイノリティの記録は多種・少量な特性を持ち、多様な媒体 (政府統計、アンケート、機関誌、チラシ、ビデオ、インタビューデータなど) に分散しているが個別のマイノリティについての記録は量的に多くはない。そのため適切に利用可能なアーカイブ化を行うには専門業者への外注だけでは不十分であり、研究に携わっている大学院生らが主体的に複数領域でのアーカイブ化に関わる必要がある (人件費として計上)。このアーカイブ化という作業を共同的に行うことを通じて、マイノリティ間の比較研究や歴史学的研究と社会調査との交錯した研究など領域横断的な研究成果が生み出され得ると期待できる。

2. 研究の目的

本研究は、マイノリティとされてきた人びとの主張や活動の記録をアーカイブ化することに挑戦する芽生え段階として、立命館大学生存学研究所などで継続的にアーカイブ化してきた身体・精神・知的障害や病を持つ人びとの記録から出発して、エスニシティなど他のマイノリティについても展開する基盤となる人的ネットワークを構築することを目的として開始された。

本研究では20世紀半ば以降の日本を研究対象として狭く設定している。だが、次の段階では、すでに研究者ネットワークを構築しつつある東アジアも射程に入る。また、時代を比較的に近い過去に限定しているのは、マイノリティ記録はしばしば断片的であり、オーラルヒ

ストーリーやインタビュー調査で補い得る時代から着手する必要性があるためである。

多くの研究者はアーカイブ化を、研究が終わった後に行う生データを整理保存の延長線上で理解している。その意味でのアーカイブ化は確かに研究の付け足しでつまらない。その通念に逆らって、マイノリティと記録の両義的な関係という観点からアーカイブ研究のまったく新しい方向性 管理・保存の技術に留まらないアーカイブの人文社会科学的な問題化を樹立しようとする試みはオリジナルかつ挑戦的であり、本萌芽的研究はその準備である。

「同時に野蛮の記録ではない文化の記録は決して存在しない」というベンヤミンの言葉どおり、マイノリティの記録 = データ化は社会的な排除や管理や懐柔の道具であるとともに当事者の抵抗や希望の表現でもある二重性を持つ。したがって、マイノリティに関して何かをアーカイブとして記録する試みは、不都合な事実からも目を背けない勇気、何が事実かを見分ける専門性、記録された事実を使いこなす実践性、その記録を誰に伝えるべきかを提案できる人的ネットワークなど、領域横断性の中に倫理的な核心を必要とする。それを可能とするのが本準備研究の目指す当事者の活動と多領域研究者をゆるやかにつなぐ研究組織である。

これまでのアーカイブ研究は、21世紀に入って図書館・博物館などが急速にデジタル化しつつある事態を背景として、まず自然科学系での観測・実験データベースの構築と人文社会科学系での調査・統計データ保存を中心に進められ、近年では聞き取り生データなどの音声記録や人類学的な映像記録のアーカイブ化も議論されつつある。

だが、管理・保存としてのアーカイブ化を行うと同時に、反省的・再帰的にアーカイブという技術と知の形式を人文社会科学的に問い直す研究は存在しない。これは、記録の収集・保存・利用のすべての段階で立場性が問われるマイノリティ・アーカイブズによって初めて可能となるアーカイブ研究への新しい理論的貢献である。

3. 研究の方法

具体的な研究推進の方法としては、当初は、マイノリティ・アーカイブズについて さがす・あつめる、 たもつ・つたえる、 つかう・いかす、の3つの視点からアプローチした。

研究代表者はこの3つのアプローチに関与して有機的な連携をとりもち、たんにデータにインデックスを付けてデジタル化すること(狭義の)にとどまらず、生成されたマイノリティ・アーカイブから社会調査や資料収集の現場に問題意識をフィードバックし()、アカデミア内での研究に加えて当事者の社会活動にも還元していく()方途もさぐる。

4. 研究成果

萌芽的研究として、図書館学、博物館学、著作権法学、障害者への情報保障などの専門家とワークショップを組織し、大型研究への飛躍的発展が得られた。

さがす・あつめる：研究遂行期間中に問題化した COVID-19 において、障害やエスニシティの面でマイノリティに属する人口集団が多大な損害を受ける事例が生じたため、機動的に対応して、COVID-19 に関してのマイノリティアーカイブズに集中的にデータ探索とアーカイブズ化をおこなうこととなった。

たもつ・つたえる：研究協力者の立岩真也(立命館大学) 後藤基行(立命館大学)と

ともにデータのアーカイブ化を行っている。この研究は、萌芽研究から発展して、基盤研究 A (2021-2025)「生を辿り途を探す 身体×社会アーカイブの構築」(研究代表者：立岩真也)へと継続している。

つかう・いかす：研究協力者の松原洋子(立命館大学) 後藤基行(立命館大学)とともに、優生学史などの文献・政府文書の収集を行い、当事者活動と連携してアカデミアに留まらない社会的アーカイブ利用をも支援した。この研究は、萌芽段階から発展して、基盤研究 A (2021-2023)「アーカイブ構築に基づく優生保護法史研究」(研究代表者：松原洋子)へと継続している。

そして、研究成果として、新しい2つの視点が現れてきた。それは、「かたる・つづる」と「たばねる・ならべる」である。

ユネスコの学習権宣言(1985年)には、学習権として読み書きの能力だけではなく「自分自身の世界を読み取り、歴史をつづる権利」もまた挙げられているという。何がどのようにアーカイブされるべきかを一人一人の当事者や本人がコントロールすることなくして、マイノリティ・アーカイブズはあり得ない。「さがす・あつめる」の切り離し不可能な前提として、「かたる・つづる」という形で個人やマイノリティのコミュニティが自分自身の歴史を作る能力を示すための条件を作り上げていくことに貢献することは、アーカイブズ・スタディーズの重要な要素となる。

そして、アーカイブズを「つかう・いかす」ためには、それが使いやすい形で整理されていなければならない。技術的にいえば、これはデータにどういう参照情報タグをつけていくかという「メタ・データ」の問題だとされてきた。だが、そうではない。

もちろん、資料を整理してうまく使えるようにするには「専門性」が必要だ。そのための専門的なアルシヴィストが必要とされており、それはプロジェクトとしての必要性というよりは、あらゆる研究を支える普遍的基盤として求められるということが明らかとなった。

だが、ここで強調したいのは(使いやすい)「たばねる・ならべる」というアルシーブ学の問題設定を、たんに技術的な専門性として扱うべきではない、との視点だ。たとえば、インターネット空間での強大な産業プラットフォーム GAF A が顧客のために「たばねる・ならべる」を代行してくれたデータベースやアーカイブはとても自然で使いやすい。しかし、事物を「たばねる・ならべる」ことは、人びとの考え方や行動の選択を強い心理的な力で支配する。それを批判的に再考するためには、その「使いやすさ」は、何を無用で未熟なデータとして排除し、使いやすさという効率性のために何を犠牲にし、ユーザーが何を行うのを支援するためにあるのか、という問いを立てることが必須なのだ。

期せずして、この「かたる・つづる」と「たばねる・ならべる」という新たに得られた問題設定は、いずれもマイノリティ・アーカイブズにおける主観性と関連している。過去から伝えられた既存の知識や語りや身振りの集積(広義でのアーカイブズ)を基盤として、私たちは社会を読み解き、自分たち自身を位置づけて理解し、表現し行動する。誰が「かたる・つづる」を実践するのかという主観性の問題は、誰のために何のためにアーカイブズを「つかう・いかす」のかとの社会的問いに直結する。また、「かたる・つづる」私・私たちは、これまで「たばねる・ならべる」という歴史の蓄積から半歩だけ身を引きはなすことで、アーカイブズの単なる延長ではない「主観性」を生産することができる。

これまでのアーカイブ研究は、21世紀に入って図書館・博物館などが急速にデジタル化

しつつある事態を背景として、まず自然科学系での観測・実験データベースの構築と人文社会科学系での調査・統計データ保存を中心に進められ、近年では聞き取り生データなどの音声記録や人類学的な映像記録のアーカイブ化も議論されつつある。

だが、管理・保存としてのアーカイブ化を行うと同時に、反省的・再帰的にアーカイブという技術と知の形式を人文社会科学的に問い直す研究は存在しない。記録の収集・保存・利用のすべての段階で立場性が問われるマイノリティ・アーカイブズによって初めて可能となるアーカイブズ・スタディーズへの新しい理論的貢献である。

領域横断的な研究を目指す本研究の具体的な成果の一つは、東日本大震災の映像アーカイブズの一つであるドキュメンタリー映画「プロジェクト FUKUSHIMA!」を軸として、アーティストと研究者が討論するシンポジウム「東日本大震災・百年経ったら—記憶・継承・忘却—」(2021年3月17日ウェブ開催)を行ったことである。その成果については、立命館生存学紀要第6号(特集号)に発表する予定である。

COVID-19 に関する「さがす・あつめる」の研究成果としては、COVID-19 禍のもとでの重度障害者というマイノリティ集団の苦境に関して、多くの論文と講演を行った。積極的に新聞紙上でも発信して、パニック状況での感染症差別に対して警鐘を鳴らした。

また、国際発信としては、2021年3月28日にオンラインで行った「ロックトインを常態として生きる with コロナ社会研究プログラムの成果から」シンポジウムは、本研究計画を元にした国際共同研究の成果であり、英語同時通訳でのウェブ開催として行い、youtube 動画として、日本語と英語の字幕付きで公開している。

<https://www.youtube.com/watch?v=CbpxsmLAKGg>

動画では、COVID-19 において大きなストレス下に置かれた人工呼吸器使用者を含む重度障害者自身の発言も収録しており、研究論文とは違う形式での、研究成果発信という意味でも新たな成果と考えられる。

さらに、重度障害者だけではなくエスニックマイノリティの状況をも取り上げて、ロンドン大学 SOAS との共同で「Learning lessons from Covid-19: Hearing voices from multi-lingual cultural and vulnerable communities, 21 and 22 April 2022」をウェブ開催する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計24件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 48
2. 論文標題 「感染までのディスタンス」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 -
2. 論文標題 「新型コロナの生政治 閉じ込めからモニタリング監視へ」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間会議	6. 最初と最後の頁 96-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 25
2. 論文標題 「ゲノム編集と社会 「遺伝子化論」の視座から」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 学術の動向	6. 最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 48
2. 論文標題 「方法としての反ワクチン」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 163-171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 -
2. 論文標題 「コロナ禍への視座」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大阪保険医雑誌	6. 最初と最後の頁 4-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 63
2. 論文標題 「安楽死は一つの顔をしていない」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保健の科学	6. 最初と最後の頁 86-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 273
2. 論文標題 「医療社会学の冒険24 新型肺炎COVID-19の時代に」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 医学のあゆみ	6. 最初と最後の頁 277-281
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 273
2. 論文標題 「医療社会学の冒険25 新型肺炎COVID-19の時代に (続)」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 医学のあゆみ	6. 最初と最後の頁 1109-1113
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 274
2. 論文標題 「医療社会学の冒険26 医療社会学の冒険 医療問題における社会と個人」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 医学のあゆみ	6. 最初と最後の頁 1145-1148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 91
2. 論文標題 Locked-in state (LIS)・Minimally conscious state (MCS)・Vegetative state (VS)に関する最近の知見	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 脳神経内科	6. 最初と最後の頁 565 - 573
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 3
2. 論文標題 マイノリティ・アーカイブズの言挙げ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立命館生存学研究	6. 最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 11
2. 論文標題 戦争/バイオポリティクス/障害	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 18-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 4
2. 論文標題 身体完全性違和	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 久住一郎編「講座 精神疾患の臨床4 身体的苦痛症群 解離症群 心身症 食行動症または摂食症群」	6. 最初と最後の頁 75-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 -
2. 論文標題 多としてのトリアージ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 小松美彦,市野川容孝,堀江宗正編「反延命 主義の時代 安楽死・透析中止・トリアージ」	6. 最初と最後の頁 137-166
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 -
2. 論文標題 精神疾患診断マニュアル DSM的理性とその不満	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 佐藤純一,美馬達哉,中川輝彦,黒田浩一郎編「病と健康をめぐるせめぎあい コンテステーションの医療社会学」	6. 最初と最後の頁 149-169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 -
2. 論文標題 社会距離という傷跡 COVID-19の風景	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 坪井秀人編「戦後日本の傷跡」	6. 最初と最後の頁 348-361
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 76(6)
2. 論文標題 配分される死 パンデミックとトリアージ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 6-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 98
2. 論文標題 パンデミック再考 生活習慣病としての新型コロナ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神奈川大学評論	6. 最初と最後の頁 125-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 32(1)
2. 論文標題 自己トラッキングからみえる未来	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 23-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 50(7)
2. 論文標題 精神医学の哲学としてのDSM的理性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 719-724
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 31(1)
2. 論文標題 COVID-19があぶりだしたトリアージ問題 生政治と生命倫理の交点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 生命倫理	6. 最初と最後の頁 12-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 106
2. 論文標題 COVID-19とリスク社会	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会学研究	6. 最初と最後の頁 12-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 32(2)
2. 論文標題 監視と保健医療社会学と新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 保健医療社会学論集	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 美馬達哉	4. 巻 49(12)
2. 論文標題 クリスパー (CRISPR) 哲学とラマルクの危険な思想	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 146-156
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 美馬達哉
2. 発表標題 「withコロナのリスク社会」
3. 学会等名 東北社会学研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 美馬達哉
2. 発表標題 「COVID-19の生政治と生命倫理」
3. 学会等名 日本生命倫理学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 美馬達哉
2. 発表標題 保健医療社会学と新型コロナウイルス感染症 監視をめぐって
3. 学会等名 第47回日本保健医療社会学会大会（ウェブ開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 美馬達哉
2. 発表標題 感染症社会の医療社会学 コロナ後に向けて
3. 学会等名 J-RIHDO Webセミナー 旬論 医療社会学の視点（ウェブ開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 美馬達哉
2. 発表標題 コロナ下におけるトリアージ
3. 学会等名 生存科学研究所研究会（ウェブ開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 美馬達哉
2. 発表標題 方法としての反ワクチン
3. 学会等名 オンラインワークショップ「方法としての反ワクチン 歴史で考えるワクチン政策と抵抗する人びと」（ウェブ開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 美馬達哉
2. 発表標題 「COVID-19の感染爆発時における人工呼吸器の配分を判断するプロセスについての提言」をどう見るか？
3. 学会等名 国際人権法学会第6回(第11回)フォーラム（ウェブ開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 美馬達哉
2. 発表標題 COVID-19とトリアージ 誰も取り残さないために何ができるか
3. 学会等名 日本生命倫理学会第33回年次大会（ウェブ開催）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 美馬達哉
2. 発表標題 COVID-19からみえる排除の構造
3. 学会等名 日本社会病理学会第37回大会（ウェブ開催）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 美馬達哉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 人文書院	5. 総ページ数 264
3. 書名 『感染症社会 アフターコロナの生政治』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

生存学ホームページ http://www.arsvi.com/
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

スペイン	ロビライビルジリ大学			
英国	ロンドン大学			